

N.ロータ：フルートとオーボエのための3つの二重奏

ミラノ出身のニーノ・ロータと言えば、特に映画音楽が有名だが、クラシックの作品も多くのジャンルにわたって書いている。1972～73年に作曲されたこの二重奏曲は「古いオルゴール」、「古いロマンス」、「水車」の3曲からなる。それぞれ2分にも満たない短い曲である。

ドビュッシー：シランクス

1913年に書かれたフルート独奏曲。「シランクス」とは、ギリシア神話に登場するニンフ「シュリックス」のこと。牧神パンから逃れるため葦に姿を変えたところ、パンはその葦で笛を作った。

G.シルヴェストリーニ：《5つのロシアの練習曲》より「ストラヴィンスキーへのオマージュ」

ジル・シルヴェストリーニはフランスの現代音楽作曲家・オーボエ奏者。2013年に出版された《5つのロシアの練習曲》は、各曲が著名な作曲家に捧げられており、本日はその第5曲、高度な技巧を要する「ストラヴィンスキーへのオマージュ」をお届けする。

テレマン：《6つのカノン風ソナタ》より 第1番

ヘンデルやJ.S.バッハとも交友があった後期バロック音楽の巨星テレマン。彼の作品の総数はギネスブックに載るほどで、4000曲を超えるという！ 1738年に出版された《6つのカノン風ソナタ》は2本のフルートのための作品で、本日は第1番をお届けする。全3楽章からなり、急／緩／急の室内ソナタの形式をとっている。

A.ヒナステラ：フルートとオーボエのための二重奏曲

アルベルト・ヒナステラは20世紀アルゼンチンのクラシック音楽の作曲家。「ソナタ」、「牧歌」、「フーガ」の3曲からなる「フルートとオーボエのための二重奏曲」は1945年の作。45年から2年間、ヒナステラはアメリカに渡り、タングルウッドでアーロン・コーブランドに学んだ。

T.マスグレイヴ：即興曲 第1番

スコットランド出身のシア・マスグレイヴは、名音楽教師ナディア・ブーランジェの生徒で、タングルウッドではコーブランドに学んだ。「即興曲 第1番」（1967）はタイトルが示す通り、自由な楽想が軽快に羽ばたく4分ほどの曲。

F.ドナトーニ：ニディ（巢）～ピッコロのための2つの小品

現代音楽の作曲家フランコ・ドナトーニは、イタリア・ヴェローナの出身。1979年にピッコロのために書かれた「ニディ（巣）」は2つの小品からなる。「Nidi」とは、昆虫やクモなどが卵を産む巣のこと。細かく素早い動きの描写にピッコロの機動性が活かされている。

G.クルターグ：《サイン、ゲームとメッセージ》より「少しの間」

ハンガリーのジェルジュ・クルターグは100歳近い今なお現役の作曲家・ピアニスト。50年以上にわたって書き継いでいる様々な楽器のための作品集《サイン、ゲームとメッセージ》に含まれるオーボエ独奏のための「少しの間」は、1分にも満たない短い曲で、オーボエ奏者ハインツ・ホリガーとの交流から生まれた。

バルトーク：2つのヴァイオリンのための44の二重奏曲より

1931年に作曲された作品で、同作曲家のピアノ曲集《マイクロコスモス》のヴァイオリン版といった内容。ドイツの教育者ドーラインの依頼により、教育的意義を念頭に書かれている。各曲に表題が付いており、その多くが東欧諸国で採取された民謡をもとにしている。本日はその中から5曲をお届けする。

W.F.バッハ：2つのフルートのための二重奏曲 第4番

J.S.バッハの長男ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハは、兄弟のなかでも最も父親の愛情と才能を受け継いだにもかかわらず、放埒な性格が災いして、後半生は不遇のうちに過ごした。しかし、その作品には個性的でユニークなものが多い。6曲ある「2つのフルートのための二重奏曲」も、即興的な性格の旋律と大胆な和声進行が魅力的な作品。「第4番」は、まだ父バッハが存命中の1740～45年の作とされる。全3楽章からなり、第1楽章アレグロ・モデラートは、楽句冒頭の飛び降りるような跳躍が印象的。第2楽章の旋律は、W.F.バッハがやはり一癖も二癖もある作曲家であったことを感じさせる。第3楽章プレストのカノンはスピード感のある息の合った掛け合いが聴きどころ。